「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書
（当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください）

	平成 30 年　10 月 04 日
所属部局・職	霊長類研究所・修士課程学生
氏　名	柴田翔平

１．派遣国・場所（○○国、○○地域）

ウガンダ共和国、カリンズ森林保護区

２．研究課題名（○○の調査、および○○での実験）

チンパンジーとボノボの攻撃性と生理学的状態の比較

３．派遣期間（本邦出発から帰国まで）

平成 30 年 6 月 17 日　～　平成 29 年　9 月　8 日　（82 日間）

４．主な受入機関及び受入研究者（○○大学○○研究所、○○博士／○○動物園、キュレーター、○○氏）

京都大学、橋本千絵助教、ウガンダ共和国森林局

５．所期の目的の遂行状況及び成果（研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由）

2018 年 6 月 17 日から 9 月 8 日の約 3 か月間行った、ウガンダ共和国での調査について報告する。

スケジュール
・6 月 17 日-6 月 19 日
出国（犬山-成田国際空港-アディスアベバ-エンテベ）

・6 月 20 日
移動（カンパラ-カリンズ森林保護区）

・6 月 21 日-9 月 3 日
カリンズ森林保護区にて調査

・9 月 4 日
移動（カリンズ森林保護区-カンパラ）

・9 月 5 日-9 月 8 日
帰国（エンテベ-アディスアベバ-成田国際空港-犬山）

本研究では、カリンズ森林におけるチンパンジーのオス間の交渉を観察・記録しながら、生理的状態を調べるために尿・糞試料の採集を行っている。本調査期間においては、対象としている M グループのオトナオス 10 個体を個体追跡し、尿試料 99 個、糞試料 84 個を採集した。
乾季である 6 月から 7 月末にかけては、チンパンジーは地上で休む事が多く観察が容易であった。観察されるオスの数は日によって大きくばらつき、集団のすべてのオトナオスが観察される日もあれば、ほぼ一日を通してオトナオス一頭のみが観察される日もあった。メスが発情していない時は、一日の観察で集団のすべてのオトナオスが確認されることはほとんどなかった。このようなオトナオスの分散傾向が、何によって生じているのかを考察するため、パーティ内のオスの数とオスの攻撃交渉の頻度との関係を分析した。その結果パーティ内のオスの数が増えると、オスの攻撃行動の頻度も増加する事が分かった。オスのチンパンジーは互いの緊張状態や攻撃行動を避けるために、特に発情メスのいない時には分散して過ごしているのではないかと考えられる。以上の行動観察で得た考察に、内分泌学的な視点を加えるため、現在、採集した試料内のステロイドホルモンであるコルチゾールとテストステロンの濃度を分析し、追跡個体がどのような生理的状態にあったかを調べている。

今回の調査期間中、チンパンジーがサルを狩猟し採食した事例を 5 例観察した。狩猟によって肉を手に入れた後の行動はその時々で異なり、肉を巡って多くの個体が叫び声をあげながら争う事もあれば、攻撃的な交渉が一切起こらず、静かに肉の分配が行われる事もあった。分配が行われる個体間関係、分配が起きる際のパーティ構成、その他の社会的状況についても特定の傾向が見られるか今後解析していく。

写真 1,2. 肉食をするオトナオス. 主に獲物となるのはシロクロコロブスやレッドテイルモンキーである.

写真 3. 肉を手にして興奮するオトナオス

６．その他（特記事項など）

今回の出張を行うにあたり、熱心な指導受け賜りました古市剛史先生、橋本千絵先生に感謝いたします。本出張は、PWS リーディング大学院プログラムの援助を受けて行われました。感謝申し上げます。